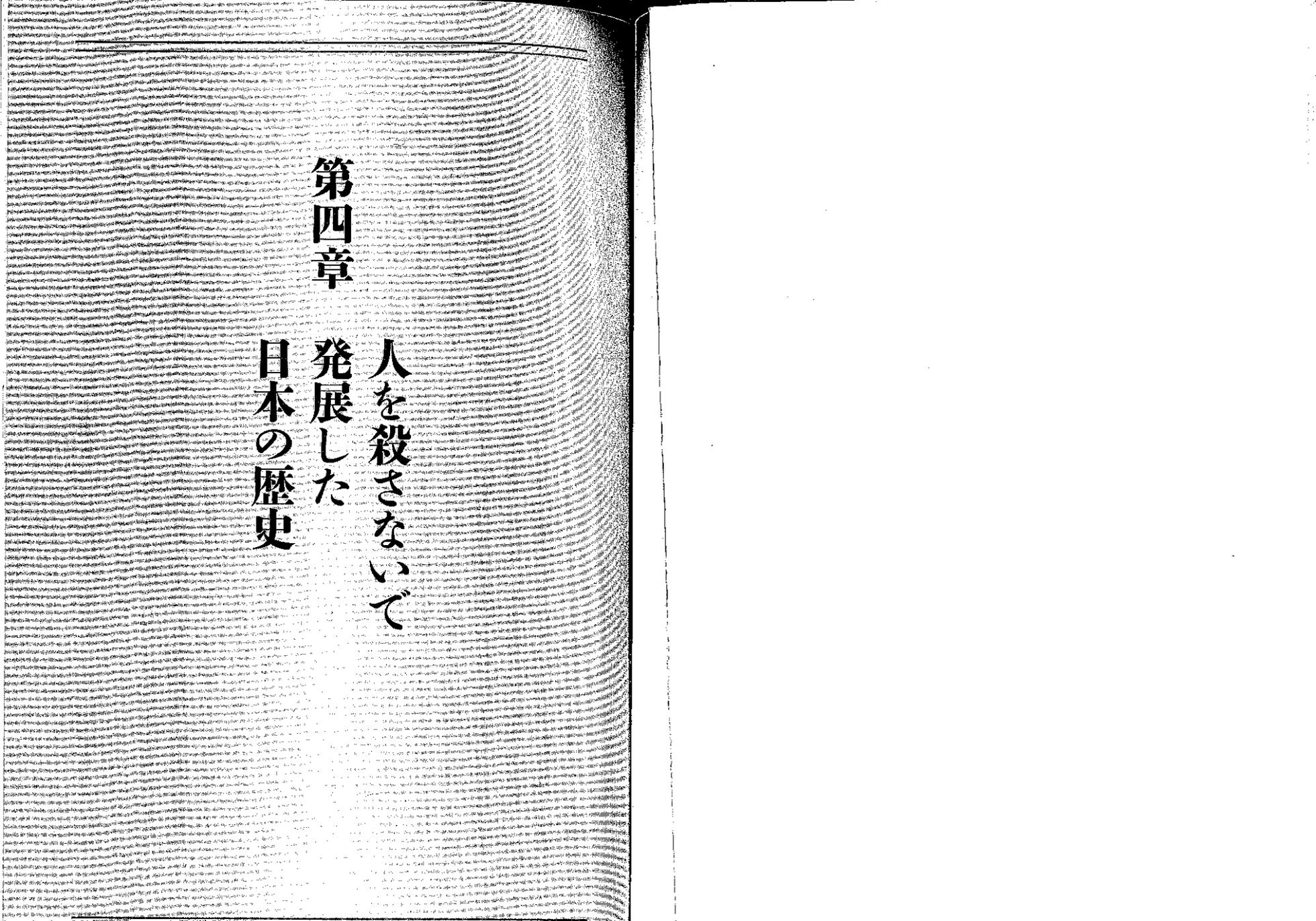


第四章

人を殺さないで 発展した 日本の歴史



一・考古学から見た日本

日本人がいつどこから日本列島にやってきて住むようになったのか、を議論するのは本書の課題ではない。

だが、教科書によれば一万六千年前から縄文文化という文化があったようである。縄文土器が、その後の稲作文化を中心とした弥生文化の弥生土器とあまりにも形状が違うので、縄文人は、現在の日本人の祖先なのかどうかと疑われた時代もあったようだが、今日では、考古学が発達し、縄文人がその後の日本人になったということが明らかになったようである。だとしたら、日本人及び日本文化のルーツとして縄文人、縄文文化を見なければならぬ。

「新しい歴史教科書をつくる会」が編集、制作した現在使用中の『新しい歴史教科書』（自由社二〇一六年）によると、日本を一万メートルの高さから見ると日本は海に囲まれ、外からの侵入を防ぐ絶好の地政的条件にあり、そしてその国土日本は森にびっしりおおわれていることが分かる。縄文人は補助的には農業もしながら、イノシシやシカや魚貝などの狩猟や漁撈で生活をしてきたようだ。だから、人は集落を作って集団生活をしていたとしても集落はまばらにしかなかった。争うこともないし、戦争をすることもなかったのは、あまりに散らばって生活し

ていたからだろう。

考古学が発達して最近分かってきたことだが、狩猟用に犬を飼っていた。そして生活の中で慣れ親しんだ犬は殺さなかった。死ぬと葬った。

犬ゾリを使って生活するシベリアなどの氷の世界に住む人は、ソリを引いた犬も死ぬと食糧にした。それと比べ環境が許したからと言えばそれまでだが、縄文人は優しい人たちだったようだ。犬肉大好きな朝鮮人と広東人とはまったく違う。

その後、稲作が導入され稲作文化が発達しこれを基礎として、日本は大和朝廷によって統一されていく。稲作文化は、米を収穫し、蓄えながら生活をした。貯蔵された食糧をめぐって戦争は避けられなくなる。弥生時代の埴輪に武人の姿を象つたものがあるが、これは弥生時代に戦争があったことを物語る。だが、その戦争の規模や残酷さは、同じころに中国で展開されていた規模や残酷さと比べようもない小規模なものであっただろう。殷、商王朝のように、おびただしい生きたまの人間の陪葬はなかった。

中国の文明では文字も殉葬（王侯の死に際し妻や臣下、使用人などを殉死させて葬ることも）も発明されており、青銅器や鉄器も先に発展した。そうしたものがすべて戦争に使われた。だが日本では、馬を四頭並べて引つ張らせる戦車も現れてこなかったし、弓より精巧な青銅でつく

る弩（びく）も使われなかった。
神話の中にある出雲の国譲りの話を見るとよい。天照大神が素戔嗚尊の子孫である大国主

命が支配していた出雲を譲るよう申し入れた。大国主命が、住み処として大きな社を作った。ここで私を祀ってくれと申し込むと、天照大神はそのとおり大きな神殿を作り、無事国譲りが行われたという話がある。いっさい血を見ることもなく、国譲りが行われたのである。その神社が出雲大社で、この神話に出てくる神殿が本当に造られていたことが、最近になって分かった。『日本書紀』などに出てくる、神武天皇の東征の話を見るとよい。この間に降伏した方の集団が虐殺され全滅させられるシーンは出てこない。神武天皇は降伏した豪族の娘を娶り、降伏した者との融和をたえず図っている。大和朝廷が誕生して仏教が日本に入ってくると、仏教は殺生を忌み嫌ったのでいっそう日本人は殺生を好まなくなつた。

仏教はそのころ東アジアに広がった哲学的宗教だが、生きとし生きるものはすべて等しく生命を享受しているものとして、殺生を戒めた。稲作文化がつくりあげた神道文化の中で、前世や来世を考えさせる仏教は日本人に深く影響していく。

二、壬申の乱―皇位をめぐる最大の戦争

聖徳太子が六〇八年三回目の遣隋使を派遣したとき、天皇の称号をどうするかが問題になった。中国と同様に「皇帝」と名乗るわけにもいかなかったが、中国の皇帝の下位に位置づける意味をもった「王」と名乗るわけにはいかなかった。そこで「天皇」という称号を創出した。「天皇」と

は道教の中で最高の神格を表す称号で、具体的象徴としてはすべての星がまわる北極星を指しているという。

「天皇」という称号を使うことによつて、隋およびその後の唐に向けて遠慮の形は取りながらも、中国の天子と同等になったことを指し示したものだ。そして、中国の「天下」とは別に、日本を中心とした別の天下のあることを示したのだ。

そして聖徳太子の「十七条の憲法」に注目しよう。これは国を治める者の心構えを示したものだ。が、今も、日本人の根本精神となつていいる。その最たるものは第一条として言われている「和をもつて貴しとす」だ。つまり人は争つてはならないという教えだ。そして、最後の第十七条も重要で、「大事は独断すべからず」とある。これが日本人の話し合いを尊重する気風の根本を表わしている。

さらには、第二条で仏法僧の「三宝を敬え」とあり、仏教を準国教化し、それが今日も引き継がれ日本人の精神の大きな基盤になつていいるのだ。

こうして、日本は海という巨大な防壁によつて外部からの脅威にさらされることなく、つまりは中国に侵される恐れなく、新たな別の「天下」を創出することに成功した。そして、国家というものがほんらい、民の安寧、幸福を願つて営まれるべきものならば、営み方次第で、そうした国家を実現しようとすれば実現できる条件を整えたのだ。

中国の場合、いかに優れた皇帝が現れて、いかに優れた理想的「君と民の関係」をその天下の

内に作り出したとしても、外部から武力でもって侵略され滅ぼされればそれまでである。いかにも良い国家を作っても、外から侵入してくる武力の前にひとたまりもなく崩壊させられる。

しかし日本の場合、外部からの侵攻にさらされる恐れはなく、国として自らの努力しだいで国家と人民との理想の関係を実現することができるのだ。

六七二年、壬申の乱が起こった。天智天皇が没したあと、天智天皇の弟の大海人皇子と天智天皇の子の大友皇子の皇位をめぐる争いだ。両雄並び立たずで、どちらかが勝ちどちらかが負けなければならぬ状態に陥った。日本にあつては初めての皇位をめぐる(中国でいえば帝位をめぐる)骨肉相食むところの、武力を使つての親族間の争いだ。中国の場合、このような状況ではたいてい数万単位の人を殺し合ひになる。

唐の太宗になつた李世民が玄武門の変で兄の太子、弟の秦王一族数万人をことごとく滅ぼした。父の高祖が上皇から退いてから、中華史上随一の名君となつたが帝位を手に入れるまで激しく一族相食む戦いをした。

日本の壬申の乱は、皇位をめぐる最大規模の争いであるけれども、中国と比べれば極めて小規模であり、残虐さも極めて弱い。

大海人皇子が出家隠棲していた吉野を脱出したのが六月二四日、大友皇子が敗北して自刃して果てたのが七月二三日、ちょうど一か月の戦乱である。記録された『日本書紀』では、尾張から二万人、美濃から三千人の兵が大海人皇子に従つたとあるが、当時の人口状況からして大海

人皇子の下に集つた兵は一万人にも満たないと思われ、大友皇子も同程度のものとすれば、総計せいぜい二万人程度のものである。なおかつ、このときの大多数は通常の農民である。このとき、大海人皇子の軍を指揮した將軍大伴吹負は「それ兵を發するの元の意は百姓を殺さむにあらず、これ元凶のためなり。ゆえに、妄に殺すべからず」と布告した。農民の兵を殺してはならないと達しを出したのだ。したがつて、壬申の乱は規模としては大きかつたとはいへ、その死者はそれほど多くはなかつたことが窺える。大海人皇子自身すでに仏教を篤く敬つており、殺生を好まなかつたが、それ以前の時代に中国におけるような残酷な戦争の先例がなく、そのこともあつてか大友皇子亡きあとの戦後処理にしても極めて寛容だつた。責任者の八名は斬首となり、さらに何人かが配流となつたが、その他はほとんどおとがめなしであつた。

三、殺生を嫌つた日本の文化

翌六七三年天皇に即位した大海人皇子は、天武天皇として即位すると川原寺で「一切教」の写経を始め、六八〇年のことだが、後に持統天皇となる皇后が病氣となると、その平癒を祈つて薬師寺の建立を發願した。そしてすでに制定されていた近江令をさらに整備することを宣した。これが持統天皇のときできた飛鳥浄御原令であり、この令で日本は従来の「倭」から国号が明確に「日本」と定まる。

さらに国史の編纂へんさんに着手し、これが後の日本最初の歴史書である『古事記』『日本書紀』となった。

いずれにせよ、壬申の乱は皇位をめぐる一定規模の争乱ではあったが規模は小さかった。この戦乱において大海人皇子は漢の劉邦をイメージしながら戦ったようだが、劉邦の残虐さにはいつさい倣まねわなかった。勝敗が決まったあとの、無駄な殺生となる報復のための肅清がなかったことは、やはりそれ以後の日本の歴史における先例となった。もともとそれまでの日本の歴史には残虐に戦った例はなかったが、この激しい争乱においても、残虐さを示さなかったことは、その後の日本の歴史にとって良いことだった。

日本人がいかに人殺しを嫌ったかについては、天武天皇が六七五年に出した「肉食禁止令」を述べておかなければならない。これは牛、馬、犬、猿、鶏を食することを禁止したものである。猿は人に似ているということからであるが、他は鶏は人に時を告げるなど、人の生活に奉仕しているので農耕期に殺してはならないというものだった。

さらに天武天皇は、六七六年「放生令」を出す。これは鳥や魚を自然に放つもので、肉食禁止令とともに、仏教の教えに従って、生き物を慈しむ行為である。

その後、殺生の禁止令は朝廷から何度も出され、鎌倉時代には鎌倉幕府からも出ている。江戸幕府でもあり、有名なのに徳川綱吉の「生類憐れみの令」で、この件については日本の人はよく知っているので、ここで私が詳しく述べる必要はない。言うべきは、日本の近世に当たる江

戸時代でも、徳川幕府によって牛馬屠畜禁止令や肉食禁止令を出していることである。特に牛馬は人間に奉仕した動物なので、食してはならないということである。これは庶民の仏教信仰とともに江戸時代において厳しく守られた。現在の日本人が牛肉を初めとして痛痒いたさなく肉食しているのは明治になって欧化政策に従ったもので、明治四年（一八七一年）、明治天皇自ら牛肉を食べて、範を示し、日本人も西洋人と同じように肉食をして、身体強健を図るべきだとしたことに始まる。

ただ、度重なる肉食禁止令が出るのは逆に肉食禁止が完全には守られていなかったという側面があるということも、見ておかなければならない。

平安末期から出てきた武士は戦闘のプロであり、いざというとき人を平然と殺すことができなければならぬのだから、地獄に落ちることを恐れて肉を喰くわないのは名誉にかかわるとしてあえて食した。

当時の庶民も、畏にかかって死んだ獣は、人間が殺したのではないから食べてよいとか、口実をつけて食べていた。殺生禁止が、魚や貝にまで及ばなかったのは、事実だ。江戸時代は、魚や貝は重要なタンパク源だった。

いずれにせよ、殺生についてこれほど神経を使ってきた日本人だから、人を殺すことには恐怖感を抱いていたことを押さえておかなければならない。

四・武士道とは何か

ここで、人を殺さないで歴史を発展させてきた日本の歴史を明確にするため、日本の武士道について見ておかなければならない。

武士は平安時代に朝廷の権力が衰退し、ほんらいあるべきでない私有地が増え、その私有地を自ら守らなければならぬ状況が出てきて、そこから武力集団が生まれ、これが特定の貴族と結びつき源氏と平氏の二大武士集団ができた、と言えるようだ。

それが一五世紀から一六世紀の戦国時代を経て、江戸時代の士農工商の身分社会で、武士は支配階級になったわけだ。

武士の倫理に関する説明が、新渡戸稲造が明治三十二年（一八九九年）に出版した『武士道』にある。その序文にあるように、ベルギーの法学の大家である、ド・ラヴレーに日本では宗教教育はしていないと話す、「宗教なしでどうやって道徳教育を授けるのか」と質問を受け、その場ではすぐに答えられなかったのだ。それで後に考えて出したその答えが、家庭で教えられた武士道であるとして、この本を書いたという。

卑劣な行動は絶対にしないという「義」

懦弱を戒める「勇」

強い者の心にあるべき「仁」

無礼をしないという「礼」

私的利益を去った「誠」

正しさの上に立って自己を誇る「名誉」

服従すべきものへ徹底して服従するという「忠義」

などが武士道の構成内容だと言っている。これは九世紀より一五世紀にヨーロッパでも現れた騎士道と似ている。戦闘に従事する人々によって編み出された、成文化はされなかった人の生き方としての騎士道である。騎士道は大義のために自分を捨てる、卑怯なことはしない、公正を重んじる、というようなことにおいて、武士道と同一なところがあるといえる。

朝鮮でも統一新羅が生まれた七世紀から少しの間、「花郎」といわれる若者の集団が形成された。これは制度的につくられたもので、日本の武士と同列に語れないが、若者は花郎になることを名誉に思った。花郎は卑怯を嫌い、強くありながら優しさを誇ろうとする武士団であった。

ここでいべきは、武士にしる騎士にしる、戦闘を生業としているとは言いながら、決して無意味な戦いはせず、ましてや無意味な人殺しはしないということが骨格となっている。

江戸時代に佐賀藩の山本常朝という人が書いた『葉隠』という有名な著書がある。「武士道と

は死ぬことと見つけた」という言葉で有名な本である。主人からどのように理不尽な命令を受けてもそれに従わなければならないということをやったもので、例えば「死ぬ」と言われればその場で直ちに死ぬということである。いさかストイックな物言いだが、そこまで覚悟して生きるのが武士だということである。そこまで徹して生きれば、自分の凡俗な欲求はすべて消滅でき、あるべき武士でありつづけられるということである。

したがって、武士は何か責めを負って死ぬときも、人によって斬られる斬首ではなく、自ら腹を切る切腹に名誉をかけた。死という恐れと苦しみに対して、他人から強制されると自ら実行するのでは、雲泥の差があるというのである。それは武士としての名誉や誇りでもあるというのだ。したがって、江戸時代の武士道に準じた武士は華美な贅沢はしなかった。そして領民への責任感旺盛で、人民の安寧と幸福に尽くした。そうした武士に支配された江戸時代は約二六〇年続いた。それから明治維新になって四民平等の近代国家になると、日本では、武士道が大なり小なりすべての国民の性格となっていた。

したがって、新渡戸稲造が言うように学校でわざわざ宗教教育を行う必要はなかった。日本人が正直で勇敢で、優しかったのはこの武士道による。

そしてそれが、この度の大東亜戦争でも、日本人の精神の基底において発揮された。

私は思うに、日本軍は装備さえ同じなら世界最強だ。日中戦争当時の実戦の場で日本軍は常に一〇〇パーセントの力を出して戦ってきたことは言うまでもない。もつとも下士官と兵士だ

けが格別に強かっただけであって、上にいけばいくほど有能ではなかった、という酷評もあるが、しかしたまに愚将が出るにせよ、日本の将校も一般的には有能謹直であったと私は評価したい。

「花は桜木、人は武士」という言葉がある。桜のようにぱっと咲いてぱっと散るの意であるが、主君のために命を捧げるのが古来武士の榮譽とされてきた。開国維新以降は忠君愛国が国民の倫理として尊ばれた。国を護る軍人が「天皇のために死ぬ」と言ったのは強制されたイデオロギーだという言い方があるが、私は、むしろ日本人としての倫理だったと思う。物量で劣る日本にとって、レイテ沖海戦に臨んだときのことだが、アメリカに重大な一撃を加え講和を有利にするためには、体当たりの特攻以外に有効な対抗策はないと思ったとき、日本軍はそれを敢行した。

その「殉国之精神」こそ、武士道に基づき日本人の誇るべきことだと私は思いたい。それは民族の精神として尊敬されているのだ。だからこそ、特攻も玉碎の精神も後世に語り伝えなければならぬと私は思う。

以下、武士道は平和でなければ生まれにくいという一見、逆のことを話したい。武士によつて平和がもたらされると、日本ではその良い方向でのスパイラルが働き、平和な社会の中で武士道がいつそう強化されるのだ。もしこのスパイラルを外部から破壊され、理不尽に多くの人が殺されるようなことが起これば、スパイラルはたちまち消えてなくなる。朝鮮半島の

場合の花郎の悲劇を見るとよい。外敵がたえず侵入する朝鮮半島では、このスパイラルがたちまち切られ、武士道は育ちようがなくなるのである。武士道をめぐる日韓の客観的な条件は、まったく異なるのである。

武士というのは、戦闘することをほんらい目指しているもので、一見すれば、武士の存在とは戦闘と表裏一体の関係にあることになる。だとしたら、武士が存在するということは平和を掻き乱し、戦乱を引き起こし、平和にとつて有害な存在であると言えなくはない。単純に考えるそうなる。

しかるに、武士は実際には強くても優しくなければならぬ。殺すことができるゆえに、意味のない殺人はしてはならない、という武士道が生まれれば、むしろ平和を維持し、武士は平和を守るための存在だということになる。漢字の武士の「武」は戈を止めるという会意(合成)でできた字で、武士はむしろ戦いを止める存在だということである。漢字は悪魔の字だと思っている私としては、あまり漢字のことで褒めたくはないが、漢字の「武」は、武士の存在意義をよく表わした漢字だということになる。

しかし漢人からすれば、「士」と「武」とはまったくの「対極語」だから「武士」という漢語に違和感が出てくるのは言うまでもない。「士」は文を意味し、「武士」という言葉の中にある「文武両道」というメンタリティは中国人には存在しえない。というのは「文人」と「武人」とはまったく異なる存在というよりも、宋以後の中国は「文人優位」の政治体制となっている。

以下そのことをもう少し詳しく説くことにしよう。いざ戦闘に臨むということは、自分が殺されるかもしれないということであれば、普通なら恐れ戦くことになる。武士たろうとすれば、まず最初の課題は、この恐怖を克服することが求められる、これを克服できなければ武士とはいえない。つまりは、武士というのはほんらい生きようとしている自己において、そのために出てくる恐怖を克服するという克己から出発することになる。人間にとつていちばん重要な、生きようとする欲求を克己によって自己の統制下に置くことである。それを実現することは、自己として誇るべきこととなる。

だとすれば、弱い者をいたぶつてはならない。むしろ弱者へ優しくしなければならない。そして濫りに人を殺さず、そして大義があるときには従容として死地に赴く。結局、死への恐怖の克服ということから、社会的には理想の人間像を形成することができるのである。よって、新渡戸稲造が言うように、武士には、宗教教育による道徳教育は必要なくなる。武士道それ自体が道徳の実践道であるからだ。

西洋人と比べても、イスラムの国々やインド人と比べても、東洋人の宗教心が薄いことは確かである。民族によつて死生観がちがう。「武士道」は、宗教と同じく「死」を考え、「死をつねに心におく」だけではなく、宗教以上に「実践」としての美学まで求めるので、私は武士道は宗教を超えていると考える。しかも善悪の規範まで超えている。

先ほど武士と平和のスパイラルの話をしたが、それに関しあえて繰り返しておきたい。武士

はいついかなるときでも戦闘をなしうる者のことであるが、そのような武士が社会に現れるためには、社会において逆に戦闘が少なく平和なときにしか現れてこないということだ。武士は死の恐怖を克服して、そしてそれを誇らなければならぬとすれば、その周囲に武士の誇りを賞讃し、評価する人がいなければならぬということになる。

もし社会の中で理不尽な死が至るところで次々と引き起こされている状況では、武士となっている者の誇りを評価する余裕は社会の中に生まれてこない。人間の本来の生きようとする欲求が無造作に否定されて、次々と無造作に殺されていつているとき、人は、本来の生きようとする最大の欲求によって、死を免れようとするのは仕方がない。その中に人を殺さず弱き者に優しい人がいても、それを高く評価する心の余裕は出てこない。

つまり、中国のように民が「戮民」として、他人のなす戦闘に巻き込まれて無造作に殺されている状況では、武士は絶対に現れない。武士と平和のよきスパイラルは絶対にできはしない。

実戦の場を見るかぎり、日本の戦争は「武士」が主役であり、「農工商」は、むしろ「競技場」か「闘技場」(コロセウム)の観客に似ている。中国のような近代の国民戦争のような「全民戦争」(天下万民が参加する戦争)とはまったく異なる。だから日本の戦争は「武士」や「兵士」が中心で、主役となり、スポーツ性が強く、フェアプレーが重んじられる。

日本や西洋のある時代に武士ないし騎士が現れたということは、そのとき、社会にそれなりに秩序があり、理不尽な死がごろごろと存在していなかったことを逆に物語る。ということは

日本に武士が現れたということは、日本がいかに平和な社会を築いていたかを物語ると言ってもよい。

武士の存在は平和をつくり、その平和が武士の存在を促進する。正のスパイラルが働いてくるのだ。そんなとき、他民族が侵入して、日本を戦乱に巻き込み、残酷な死がごろごろ存在するようになれば、日本でも武士道は滅ぶ。だが、海に囲まれ、天然の要塞によって他国から侵略されるのがなかった日本では、顕著に武士道が育ち、戦争の少ない、平和な社会として発展したのだ。

もちろん、日本にも一四六七年に始まった応仁の乱以降に、一〇〇年以上にわたって戦乱の続く戦国時代がある。まさに中国の春秋戦国の時代に相当するものだ。

だが、日本での戦闘は原則として、民、百姓を巻き込むことのなかった点で、中国の戦国時代の戦争と違っている。歴史家の指摘するところでは、戦国武将は、戦いを始めるに当たって、武将が人間として正しいことをしていなければ、神仏は味方してくれないという恐怖とも言える感情を抱いていたというのである。だから不要な人殺しはしなかった。中国の戦争のように草を刈るように人を殺すことはなかった。

応仁の乱以後の「戦国時代」では、戦争様式は古代中国の「春秋」時代にかなり似ている。しかしそれでも、日本の戦国時代も武士が主役で、民が巻き込まれなかった。中国の「天下大乱」とは違い、日本は戦国時代であっても、それほど「戦乱の時代」とは言えない。

戦国時代の戦争では、百姓は安心して戦場の決闘を眺めていた。戦国時代の終焉しゅうえんとなる一六〇〇年の関ヶ原の戦いでは、近くの百姓は、巻き込まれて死ぬ恐れはなかったので、弁当をもって山上で戦いを見物していたと伝えられている。日本では、勝敗が決すれば、負けた側の武将が腹を切るなりして負けたことを明らかにすれば、その下の兵卒や領地の百姓が虐殺されることはなかった。もつとも、全国制覇の寸前に家臣明智光秀の謀反にあつて自刃した織田信長という例外がある。信長は一五七一年の比叡山焼き討ちや一五八一年の高野山での僧侶殺害で、相手側の降伏を認めず、虐殺した例がある。日本での戦い方としては例外である。信長は、むしろ中国での戦争に倣つていたようだ。戦国時代の将である以上、中国の武将のようであればならない、と思つていたようだ。そしてそれが平然と行えたようだ。

一五七二年小谷城を落とした後、滅んだ浅井長政のしゃれこうべを盃にして酒を飲んだが、これも中国に先例がある。また、一五七五年の長篠の戦いで、武田勝頼軍に対して鉄砲を撃つ者を三列に並べて、装填準備の間をあけず間断なく鉄砲を撃つたと言われている。私はこの話は状況から見て、後世の創作ではないかと思つているが、もしこれが本当ならば、これも先例がある。秦の始皇帝が矢の装填に時間のかかる弩を持つ兵士を三列に並べて連射させ事例である。

また、信長の重視した経済戦であるが、教科書にも書いてある楽市楽座など、経済、特に商活動を重視した。戦争の仕方は、商業戦を重視した元の戦争の仕方から学んでいる気配がある。

もし、信長のような残酷な戦争の仕方が一般化して、多くの者が理不尽に死ぬような状況になると、死が予測できないものとなり、そのためには武士道は育ちにくいものになる。だが、信長は早々に消された。

五、日本に食人文化はない

本章は、日本がいかに人殺しの少ない歴史を展開させてきたかを明らかにするのが目的なので、食人についても触れる。

どこの国の歴史も細かく見れば人喰いの例はある。しかし、中国のように戦争にかかわつてその過程で一つの定着した行動様式、文化としては、人喰いは起こっていない。つまり飢餓に起因する食人はあつた。

日本のマルクス経済学者で河上肇かわかみはらむねという人がいる。この人が明治三十九年（一九〇六年）に『日本農政学』という本を書いている。この本の中で江戸後期天明の大飢饉の際に、西国を旅した医者たぢなの橘南溪たちなんけいの旅行記で、巡礼から聞いた話として書いている。ある家で老人と娘が空腹のままに息たえだえにしていたので、気の毒に思い自分の食べ物を与えようとしたが、食べようとはしなかった。老人はこれを食べてもまた明日は食べるものがなく、したがって今食べれば苦しみを永くするだけである、と断つたというのである。

